

## ガウディとサグラダ・ファミリア展

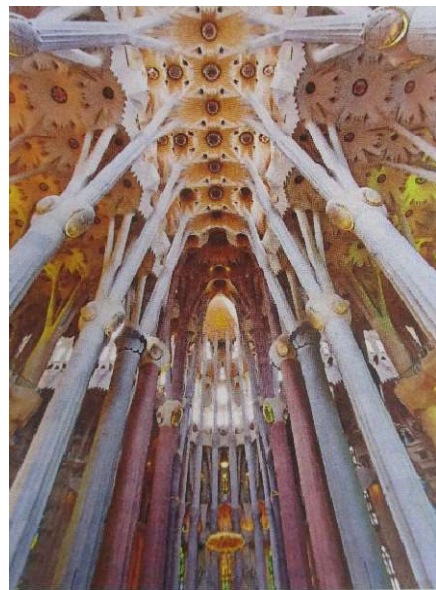
東京国立近代美術館(北の丸公園) 23.06.13~09.10

滋賀・佐川美術館 23.09.30~12.03 名古屋市美術館 23.12.19~24.03.10

スペイン・バルセロナで活躍した建築家「アントニ・ガウディ」(1852~1926)は、一度見たら忘れることのできないユニークな建築で、今なお世界中の人々を魅了し続けるとともに、さまざまな芸術分野に影響を与えてきた。



サグラダ・ファミリア全景  
隆誕の正面側



サグラダ・ファミリア内部

「サグラダ・ファミリア聖堂」は、1882年に着工し現在も建設中であるが、この名前はカタルーニア語で、「イエス・キリスト」と「聖母マリア」「父ヨセフ」の「聖家族」を意味し、カトリック信者たちが寄付を集めて作っている聖家族にささげる巨大な「神の家」のことで、目下、建設中のため世界遺産は登録されていないが、地下聖堂と遺産のみは「世界遺産」の登録(2005年)がされている。

「ガウディ」は、“太陽の光が降りそそぐ森の並木道”を思い、聖堂の内部の木の幹のような柱は上の方で枝別れし、シュロの葉をデザインした天井を支えていて、壁や天井の明り取りのステンドグラスからは光が差し込んで明るい。

本展は、長らく“未完の聖堂”と言われながら、いよいよ完成の時期が視野に収まってきた「サグラダ・ファミリア」に焦点を絞り、「ガウディ」の建築思想と創造性の源泉、さらにこの壮大な聖堂のプロジェクトが持っていた社会的意義を明らかにし、「ガウディ」建築の魅力に迫るものである。